



タレント

## 高見 知佳

私が沖縄へ、家族と共に移り住むようになり、6年目になる。今日まで本当にいろいろな事があつた。しかし、今では心の中からこう思える、「この地が私の生きる場所」である」と。

沖縄へ来た当初は、1歳になる息子を抱えての、慣れない土地での子育て、そして主婦業。移り住むと決めた時は、気持ちも新たに、この地で頑張っていこうと決意、やる気満々で臨んだ生活であつた。しかし、今までとは全く違う環境と暮らし。それに一番寂しかったのが、友人、知人が近くに居なかったことである。そんなこともあつて、私の心の中に少しずつ、寂しさと疲れが顔を出すようになり、頑張れば頑張る

ほど、元気がなくなってしまうたのである。

そんな時、この私に優しく声をかけ、心と体をそつと包んでくれたのが、「沖縄の風」だった。息子が眠った後、庭に出て風に吹かれているだけで、何故だか心が落ち着き、ゆっくり深呼吸ができた。私の心の寂しさ、不安、育児へのイライラさえも、優しく吹き飛ばしてくれたのだ。それに、明日への力もプレゼントしてくれた。沖縄での暮らしにも慣れ、6年の月日が経とうとしている今でも、「風」は私の心に声をかけてくれている。「大丈夫、大丈夫」、「頑張れ」、「泣いてもいいよ」、「さあ、笑つて」。

島を駆け抜ける風は、言葉だけじゃなく、季節も知らせてくれる。「夏の風」は、近くの公民館から、エイサーの太鼓の音や三線の音、そして歌声や「イーヤーサッサ」の掛け声など……。冬の風は、沖縄とはいえず、寒さを運んでくる。これが結構身に凍みるのだ。私も実際住んでみて実感したのだが、夏の脳が溶けてしまいそうな暑さには慣れてきたものの、冬を迎えるたびに、だんだんと寒さが身に凍みるようになった。そう、気温は高くても島を

Series

15

## 地域の目

# 「沖縄の風がはこんでくるもの...」

抜ける風が冷たいのである。そして沖縄名物「台風」は、風がいろいろと声を変えて楽しんでいるかのよう。島中を駆け抜けていく。また、風は生活面でも大いに役立っている。毎日の洗濯であるが、風のお陰でよく乾く。夏の太陽が照りつけるなか木陰に身を寄せると、なんとも言えぬ心地よい風を運んでしてくれる。心の底から「涼しい」と、思わせてくれる、本当に有り難い風なのである。さらに、毎日の生活の中で、役場、公民館にある広報塔からのお知らせも、風に乘せて届けてくれる。役場からは大切なお知らせ、公民館からは近くの漁港から魚の販売車が来たとの知らせ……。とても生活と密着している風なのである。

そう言えば、私達には昔から使っている言葉がある。「風に誘われて……」、「風の便りに……」、「風の噂で……」とか。考えてみれば、風はいろいろなものを運んできてくれているのだ。私は、本当に沖縄の風が好きだ。今でもちよつと休憩と思つた時は、外に出て風に吹かれてみる。とっても気持ちいい。落ち着くのだ。そんな沖縄の風も年に数回ではあるが、顔を見せたくない日がある。いわゆる無風状態。なんとも淋しく

心が弾まない。こんな日は気持ちも晴れないのである、不思議なくらいに……。しかし、また風が島を駆け抜けてくれば、私の気持ちもすぐに晴れる。やっぱり風は私の友達なのかもしれない。

実は、この原稿を書いている時に、風が私にニョースを運んできた。私にとって、自分が生きているこの島が過去に味わった悲惨な戦争、その爪痕とも言える知らせだった。それは役場からのもので、「本日、午前9時より不発弾の処理を行うので、海岸近くに立ち寄らぬこと」という内容であつた。初めは耳を疑ったが、2回目のアナウンスで現実にあることだと胸に止めた。そう言えばつい先日、工事中に不発弾が爆発して、若者が負傷する事故があつたばかりだ。私は風に教えられたような気がする。この沖縄が今もなお抱えている問題があることを……。沖縄で「生きる」ことは、もっと沖縄を知る「ことなのだ……。きつとこれからも私に、いろんな思いを乗せて、心の中に何かを運んできてくれるのである。島を駆け抜ける風が……。